



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100



法龜上人法語抄草書二日錄  
一テのさうりのゆ 初紙の三千行  
一あくきくらゆ 九紙の三千行  
一徳圓數正やくのゆ 十紙の三千行  
一今財仙法修り漫らゆ 十二紙の三千行  
一詔綱写のゆ 十三紙の三千行  
一法を徳すのゆ 大紙の三千行  
一詔の功徳のゆ 千紙の三千行





法苑文法經接華卷之二  
一布薩式曰戒力如金剛降伏一切魔諸魔見受  
戒者怖畏皆退散

けふ戒の力は金剛乃くもあて。而のアをざぐく  
に。りうくのア。戒けふ人をみて。おそれあ  
がめあざうき。戒は。それて切の體のドヤ。  
テ法をそいさうをすす。強弱あるべからず。  
そをもあらゆるやうに。かうとまやますのこな  
らば。りおのく入うり。修りのうばよ眠り。又ハ  
といこうのふ。さんらん。あ。づきもテさう。  
さうさんぞうふは。のまづりをす。はまを  
さめぐす。志うあ。戒をもんじれぬれば。ちそれ

やがまうや。ゆきくくもあすや。あとりゆ  
る。戒めあり人をば。善作あり。梵天帝教よ  
戒乃人をば。ゆまひて。モ礼有そくゆあらだ。又  
戒をやざりゆそば。善作ゆま。無鬼才よま  
く。ごくく日と小えて。萬の行い。ソレづと  
き。あゆじあれ地もなれ。又佛法の中の失敗  
きうとて。無鬼才もい。の是のあとをもくよ  
と。経あるく。き人の口ナと口とをもくよ  
く。とく。それこへて。あよりられやす  
一ちゆのひづき。あやまつゆこさ  
ば。あよりさんちゆ。往まんとする人よ

キ人を寫る。まくば。まくば。ナリ。かくまくべ。ト  
人アんあう。更念あて。善作へ。角くべ。まくば。無  
ナ。おとく。はうり。き。無名。まくば。角  
き。まくば。角くべ。に。あうん。まくば。角くべ  
て。あより。まくば。まくば。無ア。まくば。角くべ。は  
ん。ド。まくば。角くべ。ト。まくば。テ。まくば。角くべ。し。され  
け。まくば。角くべ。ト。まくば。テ。まくば。角くべ。し。され  
け。ア。の。まくば。尼が。まくば。中。モ。角。櫻。巖。禪。  
み。ナ。禪。の。テ。まくば。尼が。まくば。中。モ。角。櫻。巖。禪。  
ご。う。まくば。ト。せ。角。櫻。巖。禪。

物那會の時の成の以立たり。ちのゆを。かひ  
さき。くらみ少て。傍り者をうながさんよ。ち  
ひあり。はナモテバ。名をどうして。よしとハ飛をやぶ  
らねば。うんちをもそればとつづく。しゆべ  
ーとあり。オ二三のアハ。すまげなれ。が田  
ゆうね。ぐくハ。止歎<sup>シタク</sup>オハの事。よるくも。捕行<sup>ムカヒ</sup>  
曰。それナハ行志乃智無を。すうなんをそんば。  
そうちやのひをあこがれ。ハ。とひれ。そ  
をあくねり。うし。まひ。人をうち。あ  
がり。あるいハ。うし。まひ。人を。ハ。ヨモニ。う  
そらを。あ。まく。うし。ば。のを。う。まく。

やまひをあく。うらんを。一ぬあらんを。すゑ  
とくす。とかかわ。みのまご。とくじを抜く  
とく。すこしも拂へ。あひる。うちまちあ  
くまうを。うきにアシマおとにくう。すて  
影世をす。いくとび。たぬく。ぐんとく。ゆを。  
あくのがんぶをば。あひのまくあくや  
ますべーと。うきのまく。まこと華嚴經の十種乃  
て。りびきむけ者よ。うきふも念をうごとて。けむ  
をまゆまゆ。大蟲羅みひりつまく。佛事等  
の字を。あくまくせ。もあやまく。ひあく  
あく。うきれ画テのきす。うきと続く。あふ  
起信論は。ア画テうきく。まく。のれとあ

三  
やまひをあく。うらんを。一ぬあらんを。すゑ  
とくす。とかかわ。みのまご。とくじを抜く  
とく。すこしも拂へ。あひる。うちまちあ  
くまうを。うきにアシマおとにくう。すて  
影世をす。いくとび。たぬく。ぐんとく。ゆを。  
あくのがんぶをば。あひのまくあくや  
ますべーと。うきのまく。まこと華嚴經の十種乃  
て。りびきむけ者よ。うきふも念をうごとて。けむ  
をまゆまゆ。大蟲羅みひりつまく。佛事等  
の字を。あくまくせ。もあやまく。ひあく  
あく。うきれ画テのきす。うきと続く。あふ  
起信論は。ア画テうきく。まく。のれとあ

卷之二





校草

念を起してて。テラ弘と云ふと。山菴新録  
を起してり。もつてせられ事の。一念おこる  
はいきんをあわして。二念おこる  
ゆきそ。けれどかげんは。もう、うなぎをす  
よがく。拂へる。うとりじゆのうは  
も止へし。今朝御殿の魚人。世智はうとうりと  
す。それからよがねまよれはをきのう。け  
よがねまよれはをきのう。拂へる。うぬそと  
よがねまよれはをきのう。拂へる。うぬそと  
蓮せむるの。せむる人ひなはりよめじぶくす  
ば無くして。うりづしづくをす。うくして。  
うくしてとは。石のをくくやう。

卷之二

向此道場聽受戒法讚嘆愛者

同書殺生戒。叔曰。菩薩大悲爲駁。尚須爲物捨  
真。況害彼命。六道衆生皆我父母也。或蛾子在  
前。成佛可蒙其濟度。此事難知。若害彼命。與彼  
無緣。故不蒙赦也。

あらうと同べし。虫類の食ふ事あり。勤不圖能よ人を食ふ事あり。蟻もても能く  
い。と云は。ぐらうとよからぬやうに。蟻もまたもんと能く。能く。能く。能く。  
能く。梵獨の疏。虎猿。猿。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。

能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。  
能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。能く。

て可れは別れあれば。前まことに御度  
きばもあくまでりのいゆうへみゆく。窮もこ  
も盡つてゐる所もあり。復利ゆう。廣らのやうりよ  
ゆきしてアレがよろんぐと勤務おきむくとよふ抱ぐ  
事ご勤務おきむあらわく。もうちと因へば。様をひいて  
こゝ勤務おきむきりとそなふ。ゆゑを移してせまくする  
越後えちごとまんすりとあくまうれて。怪の下おとまう  
傳つたのあまきあまきてあくふれ。種たね人のことくま  
てやうて五ねあ。これいふ特化の色いろの。意い  
思おものあゆりよ。特とくりゆうめてく。身み度どあるひ  
タん。いとくとりうきよさうすや。淫慾おとこの  
氣き前まことに御度ごあらわすものちくういよ。

うりと後あとからばらのまゝとて。然しかる  
うれもうべし

一同書曰。夫以恩痴之身說法者。以鉗。一時殺害  
一閻浮提衆生者。其罪猶以爲微少。道心國賊  
也。更不可同座。師檀共墮地獄。聽聞。倫入惡趣。  
經無量劫き也

ほんじうらのん乃後法すくまは。とく人ば力こゝを以  
て。つけのらふ。あくびの一切金ありぬを  
も詫たずかくらきりむ罪つみ。往々れ。貧人きり  
る。ちももとは。印いん。座ざかとゆべ。ばまくらまくら  
りづく度どだ。ちよそがひ。お細ほそをよこげり。人よ  
せ。獄ごあらべし。主鷹津たかつばをちやうりんあらん

人乃はをもがく。かくのうとく。かくのうとく。  
人をもがく。功徳すくまく。やくゆく。人をもがく。  
物ももがく。人をもがく。徳徳ももがく。おもがく。  
物のくわく。徳のくわく。金のくわく。やく。殊  
のくわく。徳のくわく。人をもがく。又。當場  
のくわく。あらわしのくわく。人をもがく。人をもがく。  
ゆく。人をもがく。徳のくわく。金のくわく。やく。別  
のくわく。人をもがく。人をもがく。人をもがく。  
人をもがく。人をもがく。人をもがく。人をもがく。  
人をもがく。人をもがく。人をもがく。人をもがく。

人をもがく。人をもがく。人をもがく。人をもがく。  
きり。れよ。上人のひ能をもんじよ。今は化樹よ。あち  
ね人をもがく。人をもがく。この種うへ。今のは  
世をもがく。慢名すの心をもがく。心の心をもがく。今のは  
ある人をもがく。心をもがく。心の心をもがく。心をもがく。  
ほよつとある人をもがく。徳徳をもがく。徳  
公生ぐもがく。人をもがく。心の心をもがく。心をもがく。  
き人の心。徳徳をもがく。心の心をもがく。心をもがく。  
る。心の心をもがく。今のは徳徳をもがく。心の心をもがく。  
とく。心の心をもがく。心の心をもがく。心の心をもがく。  
く。心の心をもがく。心の心をもがく。心の心をもがく。

里で此はよりしてそれがあらまかねども其  
處と會ひド。すな世界の事もあらず。ち毎の事も皆  
掌の上が往々事うはまれぬもの。二時の食事も未  
すくも酒食御食をもて。金度仙飲むべし。  
是も人知ら人知。まるで食事にはあらぬ。此  
物の如き。酒食御食をもあらぬ。其の上空腹主  
の筆氣。酒食御食をもあらぬ。其の上  
爲かも。益下りはる。おのづかの事也。其の  
令功體をもつと。酒食の縁よりぬべし。其の上  
てもぐれても。身をつやうかうか。其の上人のよ  
う。其の上人のよ。へり。身をつやうかうか。其の上  
と。其の上人のよ。身をつやうかうか。其の上人のよ

あらてりの風から飛んでくる。湯と水  
の筋をすがるの三つ眼はうるさい。腰をゆく。黒  
鴉はあざやか。また金を飾り。約束よぎの  
ごくはしひば地獄の底の罪人。おもひへりあり。  
あり。あくまで人を罵るのをうばぬ。又  
よく、嘗にともどもひとうじふよきをうながす。全體も  
あくまで下部のやくまをばらさう。おもひへり  
き。ひで功臣侍へん。初のうわアんや。鉢敷。よ  
うまで。おはうとども。功臣。口も。ばらせ  
よ。神へごくよ。意図。おもてのうり。物のみ。漏文  
筆者。人をあわせ。うて。ほどの。今。みづか。おも  
か。おも。おも。おも。おも。おも。おも。おも。おも。

はされど善のまゝよきことのほり。お定  
院院君御光はおとて爲めとくお功徳をもん  
者西行をのぞむとくへゆの慶の元暦は作  
海をすくわる念をもつてゆる。安樂など  
も爲わ。止善には先の事を痛手と見て  
ふう。御圓めておけの事がほんと海の所  
運をよしむる念よりおのれをすげれどお  
のれをもつてゆく。おのれをもつてお功徳をも  
うべく。仰仰あらん僕人としておのれを  
か藏すしてどうもおもておもておもておもて  
おもてのまゝおもておもておもておもておもて  
おもておもておもておもておもておもておもて

卷之三

卷之三

物をもててありまつた。作らぬものとぞも。絶対免  
信人のまねをうそりとめたひり。まことむれ  
事。それもまたとまくのまこととまくの人達  
の事。まこととまくわが身は。それ津くあはる人は  
無能やうゆであざり。鹿葉はんの身より  
あざらかくもとせば、何ておなむことうりきり。塵  
の意を津仰。彦とふ湖のわたりよせ。絶対免  
人す。あるとて。雪とく。あうとふ被けよ。被  
ら人のありゆく。瓶鬼をうりて。彦とふ。こよいへ  
り。雪とふ。被けよ。瓶鬼のあひ。と。被きよ。まきよ  
ひのうのうの四やうよ。津仰。彦とふ。まきよ  
まきよ。と。被けよ。彦とふ。津仰。

とくに近い。とては、後記をもとめ、又は、國  
のものであるもの下部は、あわい、もと、舗  
署すしけくあるが、下部、ちを、もと、は、ある  
處事の申うる。ゆゑを、あて、あへ、もと、て、あ  
る、舗下、あら、には、舗地を、て、あら、舗下、と、  
まつり。難往集より、と、ひ、信人きりとも。  
ゆゑ、ちが、控り、よき、を、ゆく、ゆべ、ごく、密  
の、儀多き。棚は、三尺、とうり、多く、さだ、と、  
行ふねどり。また、家の、叢書、よく、多き、ゆき  
文部省、念は、らゆを、せり、あゆ、か、人あり。まことに、  
の、麻智太國、至る、よ、通とあや。古今の、人、と、今

万年はもじもひでうけいゆん。觀念をだつたる  
よしよりの名もかげて、く板念をざくりつけ  
うどや事にけり様のあひをもきとのゆゑも、  
やむれ觀念をもづや。ものよしもあて、ぐら  
やうりする。そもる觀念をりと。萬葉錄卷三十六  
の事よきより。すもれ三部物をもくら作法をあうが  
せば。印のねどとを。まのねへと。房竹叶の竹の角  
もまくあり。まをくのつもとで。ぞくもくねどくさう。  
それ竹をもくと。竹脚を。はせがふんくへ。僕人を  
もれうと。竹のすみのすみ。竹脚の本元とそ  
は丘比丘尾。式は鹿那。かく。張り弦尾。うごくく。ぶ  
いの。それあり。は丘比丘尾を。能は丘尾。三百年

金す人てのまへひそひそとひそりがたり  
とも取のまへをじはひそとあをうす  
うばひそひそとあをうす。アモあくね人の  
みをあきうひをとあをうすのや。アモあくね人の  
ひがる。無能の人ひ度ーのひばりかうそふ  
よりはまかんくよ成るわね人の  
し。涅槃經の心。りへりうくの心をやく。人  
をも却へよもとがつよ。引よめみきよと見る  
ふ今時のはせきふよう心。じののまづに。すゑく  
人の歳をうけ。歳をうけ。解り。難り。とく。  
朝代の歴史。歳をうけとく。人よ歳をうけ  
うけ。とく。じのとく。一人よ歳の食

和高もまたおのれの心を。へりまくへゆ  
らむ。まよひのまよひねんあそひ。さて地獄よあひづき  
さうやうづとおひきすうや。まゆ人ゆや今更ハ  
は和高のまくへまくじき。おゆかおゆあの方  
さんじくとあづり。のちう能く。を。おも  
もよゆへまく。おもよく。おもよく。おもよく。  
机を。おわき。は。おもよく。おもよく。おもよく。  
おもよく。おもよく。おもよく。おもよく。おもよく。  
おもよく。おもよく。おもよく。おもよく。おもよく。  
おもよく。おもよく。おもよく。おもよく。おもよく。

んより。一日のことをあわててあつてあれば一切は誤  
ね。まことにまことにとてよき事なり。おもむく  
よきもの心のゆゑで。必ず教能す。うやうやその  
とゞめぐしてよれどもううか。か事。何處によ  
くよき心をもつて。を後思をわらう。うなごと無  
きをのまづくべ。すべてんじは度極くよ  
けをうげく。ハ後りのまづく。皆後く。も  
一人の。邪々か。て。ば世わくともあくば。金石  
不く。も。嘗てやどひの。く。ははもくて法  
をもく。ひはせわく。も。く。作。の。の。  
り。う。の。歌を。かく。ば。世の。う。も。う。ま。か  
う。く。か。ても。も。か。か。く。り。て。不。節。を。



楚莊公重敏<sup>アシテ</sup>て<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>均<sup>アシテ</sup>へド。范獻<sup>ハス</sup>アシテ人の  
酒<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>も<sup>アシテ</sup>び<sup>アシテ</sup>候<sup>アシテ</sup>す。うの<sup>アシテ</sup>  
酒<sup>アシテ</sup>や<sup>アシテ</sup>か<sup>アシテ</sup>け<sup>アシテ</sup>金<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>候<sup>アシテ</sup>す。うの<sup>アシテ</sup>  
金<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>よ<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>り<sup>アシテ</sup>に<sup>アシテ</sup>く<sup>アシテ</sup>る<sup>アシテ</sup>から  
だ。うの<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>ひ<sup>アシテ</sup>ぐ<sup>アシテ</sup>し。裸<sup>アシテ</sup>の  
身<sup>アシテ</sup>入<sup>アシテ</sup>ゆ<sup>アシテ</sup>す。金<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>西<sup>アシテ</sup>づ<sup>アシテ</sup>や<sup>アシテ</sup>刑<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>終<sup>アシテ</sup>  
あ<sup>アシテ</sup>づ<sup>アシテ</sup>も<sup>アシテ</sup>極<sup>アシテ</sup>と<sup>アシテ</sup>教<sup>アシテ</sup>か<sup>アシテ</sup>し<sup>アシテ</sup>る<sup>アシテ</sup>。左衛  
圓<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>ぐ<sup>アシテ</sup>り。あ<sup>アシテ</sup>い<sup>アシテ</sup>は<sup>アシテ</sup>仏<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>圓<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>  
う<sup>アシテ</sup>ひ<sup>アシテ</sup>て<sup>アシテ</sup>。金<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>候<sup>アシテ</sup>り。と<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>人<sup>アシテ</sup>あり。が<sup>アシテ</sup>  
う<sup>アシテ</sup>。か<sup>アシテ</sup>し<sup>アシテ</sup>は<sup>アシテ</sup>金<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>候<sup>アシテ</sup>り。強<sup>アシテ</sup>銀<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>幼<sup>アシテ</sup>も<sup>アシテ</sup>  
う<sup>アシテ</sup>。か<sup>アシテ</sup>い<sup>アシテ</sup>ど<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>金<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>候<sup>アシテ</sup>り。う<sup>アシテ</sup>。

左衛門の圓<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>。う<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>ね<sup>アシテ</sup>く<sup>アシテ</sup>お<sup>アシテ</sup>は<sup>アシテ</sup>。  
う<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>は<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>ま<sup>アシテ</sup>す<sup>アシテ</sup>。不<sup>アシテ</sup>善<sup>アシテ</sup>苦<sup>アシテ</sup>は<sup>アシテ</sup>き<sup>アシテ</sup>わ  
う<sup>アシテ</sup>。ま<sup>アシテ</sup>能<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>す<sup>アシテ</sup>も<sup>アシテ</sup>も<sup>アシテ</sup>そ<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>ま<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>。  
能<sup>アシテ</sup>も<sup>アシテ</sup>可<sup>アシテ</sup>り。修<sup>アシテ</sup>り<sup>アシテ</sup>ゆ<sup>アシテ</sup>き<sup>アシテ</sup>よ<sup>アシテ</sup>じ<sup>アシテ</sup>ら<sup>アシテ</sup>御<sup>アシテ</sup>教<sup>アシテ</sup>す。  
ゆ<sup>アシテ</sup>り<sup>アシテ</sup>か<sup>アシテ</sup>め<sup>アシテ</sup>あ<sup>アシテ</sup>そ<sup>アシテ</sup>か<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>き<sup>アシテ</sup>く<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>。ま<sup>アシテ</sup>  
う<sup>アシテ</sup>。う<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>べ<sup>アシテ</sup>し。不<sup>アシテ</sup>附<sup>アシテ</sup>け<sup>アシテ</sup>い<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>。う<sup>アシテ</sup>  
を<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>。金<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>か<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>行<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>と<sup>アシテ</sup>わ<sup>アシテ</sup>り。  
如<sup>アシテ</sup>樹<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>。あ<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>物<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>ら<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>ぬ<sup>アシテ</sup>く<sup>アシテ</sup>る<sup>アシテ</sup>人<sup>アシテ</sup>じ<sup>アシテ</sup>。  
それ<sup>アシテ</sup>うち<sup>アシテ</sup>三<sup>アシテ</sup>毒<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>ら<sup>アシテ</sup>あ<sup>アシテ</sup>。あ<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>つ<sup>アシテ</sup>も<sup>アシテ</sup>。ま<sup>アシテ</sup>ト<sup>アシテ</sup>り<sup>アシテ</sup>  
き<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>つ<sup>アシテ</sup>る<sup>アシテ</sup>。あ<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>食<sup>アシテ</sup>禁<sup>アシテ</sup>。小<sup>アシテ</sup>私<sup>アシテ</sup>財<sup>アシテ</sup>鹽<sup>アシテ</sup>比<sup>アシテ</sup>丘<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>ま<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>  
う<sup>アシテ</sup>。黒<sup>アシテ</sup>ん<sup>アシテ</sup>ら<sup>アシテ</sup>根<sup>アシテ</sup>動<sup>アシテ</sup>ます。う<sup>アシテ</sup>。種<sup>アシテ</sup>の<sup>アシテ</sup>む<sup>アシテ</sup>る<sup>アシテ</sup>  
う<sup>アシテ</sup>。う<sup>アシテ</sup>に<sup>アシテ</sup>知<sup>アシテ</sup>を<sup>アシテ</sup>あ<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>と<sup>アシテ</sup>う<sup>アシテ</sup>ふ<sup>アシテ</sup>。う<sup>アシテ</sup>

生ぶての能合をあへん事無事而平万  
億ももうべ。事あるゆきの事あらわのを  
従ふる。出来がる候も。是れをもとへ。おもろ  
猶猶老人より能くらむた爲よや。どうぞもん  
じめうり。おもてありうるの事あがくを  
さうすて。この事のうるをうつして。おもて  
人乃至ちのまちの事。どくとくとく。又は  
おもての事とて。おもての事とく。おもて  
おもての事とて。功徳ありとくとくあればよそり  
おもての事とく。おもての事とく。おもての事とく  
おもての事とく。おもての事とく。おもての事とく  
おもての事とく。おもての事とく。おもての事とく  
おもての事とく。おもての事とく。おもての事とく

かくのうじに食を食ふる人うばづくわうりとておもひ  
き。まづ新ひの年あべが歳をすむけり  
て、うそてはよかうる。あづかのせん  
くもかへが度す。あづかのせん  
がさうりも食ふまびがうつ。食ふをとけゆる。  
年はの重病なまくへり。桂獨院あら病の  
をあらまどまくへり。仁慈寺あらまくへり。  
きよみの御がを物もあらへり。おほに信  
喜するまくへりとくづりんや今能くへり。  
病の人に食を給くへり。功成くへり。かく  
くもせうりのうへり。かくくへり。かく  
くへり。まどれ食を。齋すらめてよる。

を解けの心かくはまほどのまへもせず。  
もがのめりしげのめうりとす。まじめに経  
験くらうしてどうひらはれどもゆく。解り  
くらて器くらう。あらわのむらゆづべ。よ  
うべとも。解り精をくらば。ほんのうな解くら  
う。解り事の本のを解ぬべ。とく  
りて。かく。満徹する。十種のがくらるる  
萬向くらしき。けり力くら。ばくは。はせき  
ば声す。解くら。けり力くら。くらぐる。おもむすくら  
くら。多くて事くら。ちぢめて解くら。解くら  
くら。うつむ事くら。智あくで解くら。解くら  
くら。別ありと既くら。既くらて今時の心の解くら

すすむ。清めをもつて人ぞ。今多くを思す程  
清めのうどくと云ふれ。蓋て心事の往來  
の風のうとす。はるか一絆とぬまでも。左傍を後  
輩をよゆるし修り。身のわたり。とくに後  
代を顧みたは。必ずしてハ。まことに。右の屏  
もあても。ば川原には。のみの風。いづらむ。左の屏  
とて。隣よおぢりて。もあを。引うて。りべや。す。あ  
く。ゆきを。あづけ。ほのうは。まち。まづ。さう  
あ。がへて。のね。うのゆを。教ゆ。時。家のゆ  
事。おどん。うのとく。は。がひ。い。風。すれ。は。は  
そ。一。ま。う。は。のとく。うん。や。ゆ。のゆ  
く。の。う。か。か。か。か。か。か。か。か。か。

よ。まことうれば、おのづかんふぞくうす。それに行  
様よ傷を蒙へて、ひき難の脚をもつて。偏轡をも  
りあて、三せよ蟻とさうう。口と唇をもつて、年  
齢よほどのうしひし。手と足もはずや。じあ  
うへ人間を割て樹とよゑす。だあい  
すそ

は先上人は角根草草に三月餘  
一詠のやうのゆ  
一善を讃のゆ  
一惡を讐のゆ  
一詠を詠のゆ  
一詠を詠のゆ  
一詠を詠のゆ  
一詠を詠のゆ  
二紙の音

後後上人法語卷之三  
六  
一布薩式曰。可恐之甚。無過女人敗正毀德。莫不由之。故丹之蜜。貪毒花之色。有多智禪定現前。如不斷焉必落魔道。設雖出家形帶妻子者在家也。更不可成出家思。

同書二曰。妄語之人。虛實顛倒。不受善法。譬如意覆瓶水。不得入。心無慚愧。閉塞涅槃之道。實不語之利。為易得道。妄語之人。諸夫見之捨。不護。近年無道心僧尼等。或好博奕。或好圍碁。繩索等。或吐誓言。則毀破如是。凶惡之流死。墮三塗古地獄。無

量劫無出期。若以小分衣食施此倫，借一宿，床之輩。但招地獄種子，將天魔眷屬努力不可同座，不可同行也。

志す事のやどをうそりも堪へのまゝゆ。因  
ちくまのやどをうそりも堪へのまゝゆ。因  
る人共てがくとあらわづのゆを給ひをめら  
ると。萬物を多給す爲り。

同書曰。成他。惡業醉酒時無不造。一切惡能作  
五逆等罪。大智度論三十五失。余終墮惡道泥  
梨中。不應酷酒。自飲地獄之中。地獄也。棄諸善  
功德。知愧者不飲。

はん漏をうるゝ時をうよ。人を愚弄する  
を。漏すをうして。一切の悪をするが。運氣をうけらう。  
人を愚弄するが。年少のときを除くれば。人を  
漏すをう。或く漏をうのひづば漏がくの人の

うき。りかくの善惡をうよ。かくの善惡を  
まゝれども。終る。在處漏す。み戒の事。漏氣りとも  
り。じ業の惡。うふり。うんぐとあり。家の世の  
小僧とく。念むて。新ちの祖。まわる。の。まよ。一生を  
の。まよ。うふ。敵。このりとみて。わき。うり。すく。うづ。  
ひの。まよ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。  
うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。  
うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。  
うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。  
うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。うづ。

千百指より其手の盜賊をして、彼等をつくし。或ひ之  
を敵上に立たせぬかとて車載をばほほくす。かく  
と如何。而して其の後も其の如き

同書不說四衆過戒，只曰求其短言陳其過負其重憊於惡人或加教訓令改其行或不順教訓者遠之

ほんまがまかのあやまつをせとあそぶるゆゑど  
よめり。而て西人をアリヘド。ヨーロッパの者。  
もくらう。アーティスチック。アーティスチック。  
アーティスチック。アーティスチック。アーティスチック。  
アーティスチック。アーティスチック。アーティスチック。  
アーティスチック。アーティスチック。アーティスチック。  
アーティスチック。アーティスチック。アーティスチック。

同書自讚毀他戒，說曰：自讚乃托滅善根，毀他便招罪業。

ばのひゞぎ身をいめ。他人をもあらうあり。ひゞぎ身をい  
めれば。善根すくらむきり。人をもよそいバ罪とぬきり。終  
一異傷る。自餘他毀く。すまへり。ゆき  
一同書故惺緣戒。衆曰。捨惺成施。有財之人惺惜。  
其珍不簡。親疎不施。墮餓鬼道。

はくはくを御してやどこまわの御ひを飛と如す。物をいはすて。持て。ありの命を拘りて。あらゆる事も。うるさく。持てたる者て。錦鬼。おも子。御も。狂跡をよその御の爲を。おこなふ。まことに。ものめりきり。圓鏡。持て。おも

修<sup>キ</sup>志<sup>シ</sup>て<sup>シテ</sup>は<sup>ハ</sup>生<sup>リ</sup>ま<sup>ス</sup>。ま<sup>と</sup>う<sup>ん</sup>と<sup>シ</sup>歌<sup>ハ</sup>ひ<sup>ム</sup>す。修<sup>キ</sup>志<sup>シ</sup>て<sup>シテ</sup>は<sup>ハ</sup>生<sup>リ</sup>ま<sup>ス</sup>。  
人<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>く</sup>、<sup>ア</sup>並<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>人<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>。恩<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>り<sup>テ</sup>む<sup>ニ</sup>。人<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>り<sup>く</sup>、<sup>ア</sup>並<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>人<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>。  
も<sup>と</sup>て<sup>シ</sup>れ<sup>タ</sup>る<sup>人</sup>も<sup>と</sup>て<sup>シ</sup>わ<sup>れ</sup>た<sup>る</sup>と<sup>シ</sup>れ<sup>タ</sup>人<sup>。</sup>  
同書曰。戒<sup>レ</sup>中寂<sup>モ</sup>重<sup>キ</sup>莫<sup>レ</sup>先<sup>此</sup>燒<sup>シ</sup>滅<sup>ス</sup>宿<sup>世</sup>諸<sup>善</sup>根<sup>ヲ</sup>能<sup>作</sup>無<sup>間</sup>罪<sup>ヲ</sup>成<sup>ル</sup>百千障<sup>。</sup>

はまの眼はまよ花より。一切の戒のやまとまを身に付く。  
生ま世との善根をまよがうむすび無事にばくよ  
ゆくよきり。百年のよきりゆづみとくおこくよきり。形を  
ひりゆきとくよきりゆづみつあや。難よ思厚才一ノと  
モ。又想のゆづみ戒若行よりまよきりよきり。揚  
湯のゆ獄。ゆくよけて修むよて。ゆくよける人  
同書諦三宝戒。曰。燒滅善根。惡中極成阿鼻。

紫

げひの二室をもたらへ、深さの三丈ばかり。一切の書  
報をやめほぐれ、筆の毛極まり。筆舌堵ぐるも  
つらうり

同書曰。戒是雖非本願。一定得往生業也。所以者。何三福散善。世尊自開散善惡者。佛有何毒。自開三福。令諸衆生行諸散善。今此戒行者。更非雜行。但念佛行者三業四威儀守也。所以然者。設雖念佛行者。必可作畜生行邪。見平  
ばく戒ハアムシのモヤシナリ。ホドヒタチヤ  
往生行を費ス。多シハ。戒師不三福の教言を。  
人の事半のねが流ス。これりもチヤ戒ナリ。戒ガア

まゆうばのひのうがもしくて往生をす  
かのやく戒をもととおへりんやく戒  
雜じてはるはれ金のいきの身と心とくとくハ  
あらはせしもとくあら時もまほらふもまほ無事  
をめぢりたり。一の念ののをもとも畜生とが  
邪々と燃ふとあり。私も戒をもとめぞ  
畜生なり。邪々と燃ふと爲す事の  
やう。今は念の者ゆの後も戒が爲す事の  
あるが、若年頃もさうすやと多くおこし  
れど、やうやうもよす。上人の御へをも聞ゆ  
らずや。ふくふくも修り身の淨化を  
ぐくよ。玉人の淨化は修まるとすじよ。

也くやの勢氣の如きは御満足じ。又解説が今  
せきするが如き。一歩を出でても氣を失つてはま  
とよ。それより人ての仕事はひらく。よもやかに。うそを  
あくまつ人をがまかすありとどあむ。それいが儀  
實としてやの如き。一歩を出でても氣を失つてはま  
れあら。一歩を出でても氣を失つてはま。若ちあらとがまへ  
み。せきの如くやの如く。一歩を出でても氣を失つてはま  
とよ。ばげ人ふゆそれ若ちあらとがまへ。生まばらづ  
きの彼の如き。一歩を出でても氣を失つてはま。若ち  
ぞ。豫備あら。一歩を出でても氣を失つてはま。若ちあ  
んぐ。一歩を出でても氣を失つてはま。若ちあ  
て。出でても氣を失つてはま。若ちあ

つままでの事もとての君利のくわくをも。とより  
ゆう修そも。歸あしてこやすくけのべど。名うゑ  
へも。また益此のくせよ。くれもひゆをむねる  
正。日中あてもか。ひまつとの處も。ひじ  
じきの通の。た。あらんくはるのをすて。お  
ゆふさて。怪傷をひづくと。おもひの妙も。あり  
て。怪りゆくや。程も。細あそばに。ひづく。切  
の戒くたのも。をもすくわくを。経法をも。ふ  
人あれ。怪傷の又を。りふく。と。おもひの妙も。くる  
くよぐものあやまり。ひあく。わく。ゆく。を。  
らすく。とく。す。怪傷の。ほの火を。ふく。ひく。開  
き。おを。おねね。うり。うる。人を。ば今。の。びら。血。の

りの。くも。の。ま。ひ。き。ぐ。だ。と。御。う。り。それ。う。う。の  
磨。亮。ば。う。う。み。ひ。か。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
ち。う.  
腰。も。よ。ひ。と。船。て。手。を。と。ひ。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
の。身。す。う。う。う。は。つ。身。と。ひ。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
ひ。に。び。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
と。ま。が。や。み。ま。の。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
び。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
て。あ。ゆ。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
の。地。す。お。わ。う。う。う。を。ひ。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う.  
活。氣。脩。の。く。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。

侍りて御利よりあや。そのまゝへば御お  
りあら。塵囃やのふるむから教へられ教のじよ  
をめうひうり。あらうて善き事はほくれと後がすれ  
きて。うちのまつもとお人の力のへりゆをつ  
ひ。ふとましにとおもひてよき事  
眼を剝きものあや。さて三面の御神生應づ  
き。ひとりうく。まづ身のとよす御神をすいひよ  
るあり。或安坐を食事も豊充をとむむひよ  
はのち。おはな劍をうつし。まづのうめうがどく  
ふく。おまきのちもとむのうめうかあるの名す  
とあらう。まづのうめうかある。おま  
體食事を行ふ。おまきのうめうかある。おま

さて、既にうつむかへておるまゝで。今や  
さういふ事は、何處かの傳説であつて、  
その本源は、必ずしも、古くからある傳説  
の一種と考へられる。それで、それなりの  
考究を怠らずして、その事実をあつて、さういふ  
傳説の流傳する所を、その本源をさへして、もはや國の  
事実である所を、國の事実である所とするのである。  
かくして、ある種の傳説が、いつとも無終止であつて、  
其の根柢があるものがあつて、國の事実となるのである。  
従つて、その傳説の本源は、必ずしも、その傳説の本源  
である。それが、必ずしも、その傳説の本源である。

せうすれ。廻まひ度をとひて人を残りつ。な  
んあよりがりか。じの晉代難のあたり  
をまとうじつ。國体をうきめに成るがゆゑ。  
」（おもて）あはれの御内殿のまことの金のむすり  
を、とおもひて、まことにあつたり。ちよちよとぞ  
金銀をくわへ。富貴の私財すびきつらひ。よ  
つわくやまくわう。飛をとめて。ばのまくよ。を  
ちゆゆくわゆ。飛をとめて。ばのまくよ。を  
破綻をすくし。うつせのせうのまをくわよ。よ  
すくくわよ。とむだに。飛のまくよ。あるぬを  
きり。おもひて。まことの馬をとく。うきめのゆ  
きり。おもひて。まことの馬をとく。うきめのゆ

まことにアラスラのよみうり金券を取る  
手筋のうちを人間をあてておこなうと  
てちや食料による手筋をあわせば、可とおもひ  
んぐ手筋のつとめをもつて、せせめの  
手筋がおきらめたりて、備ておのねうき  
にまつまつと手筋をして、うしろのまくはりて、  
せのまんじくのまくはりをあわせ、あわせ  
をあわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、  
あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、  
あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、  
あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、  
あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、あわせ、



あらまき能て経のよきを後代の人々に傳  
経のよきを後代の人々に傳  
えずは身をも持たば何ぞか。三事の身をも  
あつては、何ぞ身をも持たば何ぞか。三事の身をも  
あつては、何ぞ身をも持たば何ぞか。三事の身をも  
あつては、何ぞ身をも持たば何ぞか。三事の身をも

西郷村を公儀のやうにうながして。お城の事を  
考ふれば世の事よりはアハと云ふ事あつて  
ハシモトよりて少しあつたよりもううまくはな  
んちと原の山一合もせぬよしをうながす。西郷  
もうみとすりとすりぬるよしをうながす。  
すきの腰りをさううかねてを取ひてゆく。  
うらものうちかむははうりとすりとすり  
はせぬ。あまうごくととのへてすりあらう  
とすりあらう。さうすくはうそゆめうをくみて  
在ひ人ひきくらう。さうすくはうそゆめう  
含むとすらうだりあり。せのうとおとおとおと  
とまう。うりよがのうをうそゆめうてよ。金持人

とさうしておはなをばらと切へてきよれをくふん  
てんがおもての細毛をくじく。まつげをくじく  
くすり。やくそを取ておはなを洗へおちでまづりを落  
をけつ。匂方跡をうそびて。まじめくは。の  
うごくと。おまかせをあらんあまそ。まくらにハ  
やうぐは。ひきとせの食を。うほはあらずや。高  
きそゑのやまと傳の薬。あそまゆるを  
くじ逃あ。うそびておまかせをあらんあまそ。ま  
くらとまのゆと毎日おまかせのあそばむをうごく。の  
うごくと。おまかせをあらんあまそ。金をく  
くすり。おまかせをあらんあまそ。金をく  
くすり。おまかせをあらんあまそ。

の極めてひどいの圓く渾まつたものとて、  
主にねだり修りのよどみなく修りん事のあらざを  
あらわす。ゆゑひのゆゑは、  
筆痛ちて、かゝる事、  
必能の手程か。その間のひそむる筆の意をも人  
べば、是半半修りにて。極めてひどい事とは  
けて、さうぞ、被へて、はるかに、其の筆とて、  
また、おとづれし事、其の筆とて、其の筆とて、  
もあきらかに、あるて、はるかに、其の筆とて、  
り、されば、前回の修り考の筆とて、其の筆とて、  
重版とて、うて、前回の筆とて、其の筆とて、  
は、筆をほの圓くもじり、其の筆とて、其の筆とて、





ばくは櫻あはれをもんとおひづるおのこの移生戒を破  
アモ。アモをほくべき。私よりの心の内意を  
かうて思ひあわねと書ひゆうとすてこそ  
あはれ。シテ御み在すとぞ。まうてわざとゆくじ。  
それ御の歎づふ。群属くにあるまうとづけよ。そ  
れかくとくとく。華嚴經の千種せきの千種せき一  
ひじりとすか。かの経の事と事をこうみてせん  
まゆき。人情を叶の事と事とおひづるをうながわせ  
てえいだる金と金と金と金と金と金と金と金と

一同書曰。念佛行者。言不用戒行。豈應犯偷盜戒。  
げんへ念のののをひかへりやといつばくは筆を  
もべさ

一同書曰。念佛行者。強應好邪搖乎。  
げんへ念のののをひくりの邪搖をみじまし  
る。邪搖をおこすりのへ。至てばくへおち。劣ハ  
やけらめのむらをいざ。女熟てのの本もあ  
きと搖るるをよそをよそ

一同書曰。念佛行者何好不實可虛言妄語乎。  
げんへ念のののをひくりをみじまし。どもをよそ  
もそ

一同書曰。念佛行人放逸強應酷酒乎

げんへ念のののをひくりをよそをよそをよそ。  
絶命湯をくすりね花めや。人をもくじり。今  
て罪をあらわす。鬼同同連宿もんとく。又屬聲を  
おうぐ。室無聲をもどす。おやづりをも。毗沙門湯  
ゆき

一同書曰。念佛行人何背法誹謗貞良人乎。  
げんへ念のののをひくりをよそをよそをよそ。  
あらわらまう

一同書曰。念佛行人何應自非為是謗他好善  
為非乎

げんへ念のののをひくりをよそをよそをよそ。  
まやまやまやんや。私心。涅槃。涅槃。一闇經。涅槃



卷之三

慢毛。人よへりへままでありとあらう。ひきをねり  
一同書。曰。念佛行人。何。背法。應行。慳貪。乎  
ひん。念ひののの志。行そはすそひひて。わゆ。も

う。ま。勝光ちの御機ひ。かをとる。今。せよ  
會あつ。おをねうて。ほんぢよ。あやまつと。お  
も。これまた。お候ちうべ。どうごびゆ。おうづ  
へ。く。ほ。事。い。ま。う。お。ね。を。お。う。ゆ。づ。り。ん。や。お。せ  
の。お。意。る。ぞ。う。う。み。そ。や。ほ。う。ま。お。う。じ。の。  
人。ほ。く。こ。せ。の。死。す。ぐ。り。う。の。死。す。が。人。  
を。ま。り。き。く。と。と。大。剣。然。く。を。ゆ。う。と。よ。が。れ。さ。い。ん  
を。持。ち。だ。と。ふ。く。う。ろ。こ。び。く。も。人。お。ひ。す。人。す  
き。い。う。て。く。上。五。そ。を。ぬ。物。そ。と。お。う。と。き  
一同書曰。念佛行人。豈好誹謗。三宝。卒  
げん。全。の。の。志。け。そ。を。も。も。う。ど。く。れ  
る。右。十。戒。梵。獨。律。の。す。禁。戒。を。う。れ。三。部。を。

ひもか。<sup>えま</sup> えのむまへり。教わる御事多し。解せ生  
はうかどめ事無也。うるべらんくハ。教説生矣。  
かの物を承りまへ。あきてあをせんと。  
のぞき書くもの

一同書曰。乞願号<sub>二</sub>予門人道俗等可持十戒。若備不能守十戒可持五戒。  
はい。ひねづくはんのうをもつて。信も信よ。半  
戒をもつて。がくとくす。ありのうづける。  
ちあてゆれをもつてとうり。がくとくす。おとこのうれの  
布薩の式をもつてあるはまく。がくとく上人の嚴法  
式と。奥をもつて。念のうよへかひてもぐのゆきで  
もく戒をすめりよ。がくとくよもじみて。戒をす

まわらへんはくのくとまがいへくとま  
のまや

